有毒植物(5)

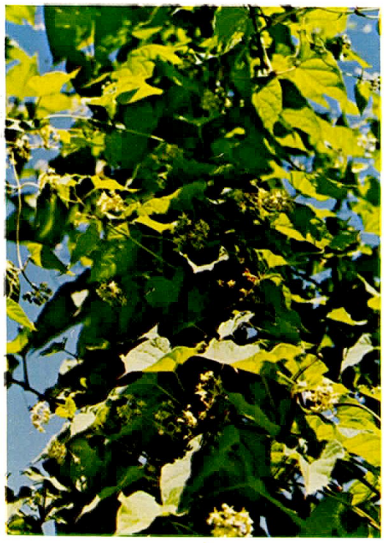
北大薬学部教授　三橋　博

ガガイモ（ゴガミ、クサパンヤ）
（ガガイモ科）

北海道から九州、又東アジア一帯に広く分布するつる草で、長い地下茎を引いてはん殖し、茎は長くのび緑色で長さ約２ｍ、葉は柄があり対生し長心臓形で全縁、支脈がはっきり見える。茎や葉を切ると白い汁を出す。夏、葉腋に長い花柄を出し頂に総状に淡紫色の花を開く。果実は広皮針形で表面にいぼがあり、長さ約10cm、幅２cm、種子は扁平で白色の絹糸状の毛があり風にのってとび、綿の代用として印肉、針挿等に用いられる。実はラマ子とよび強精薬としたり生葉をつき砕きその汁を腫物に塗ったりした。これも有毒成分を含み配糖体型の化合物で、それらのいくつかはガガイモにちなんでラマノン、メタプレキシゲニン等となづけられる多数の複雑な化合物を含む。

オオカモメヅル　（ガガイモ科）

北海道、本州、四国、九州にはえる多年生のつる草で茎はほそくて長くのび他物にまつわる。葉は柄があり対生し皮針形ないし三角状皮針形で大きく葉先は長くとがり基部は浅い心臓状で両縁は丸い耳形、夏に淡暗紫色の細かい花をつける。果実は袋果となり狭皮針形で長くとがり長さ約５cm、種子は扁平で細長く先端に白色の長い絹糸状の毛がある。イケマ、ガガイモに類した有毒成分が含まれていると考えられる。



イケマ
（ガガイモ科）

各地の山野、ことに北海道に多く自生する多年生の蔓草で根は肥厚して紡錘形を呈する。茎は他物にまきつき、切れば白汁を出し葉は対生し心臓形で先はとがり全縁、夏、葉腋に長い柄を出し頂に白色の細かい花を多数散形につける。イケマは元来アイヌ語でのちに生馬の字をあてはめたので家畜特に馬の諸病に効があるという俗説が生じた。又牛皮消根(ヤマゴボウの根)と混同されて扱われたこともある。これに近い植物はアフリカでも矢毒に用いられており有毒である。毒成分はチナンユゲニン、ペヌポゲニン等である。